

「新しい世代が見た満洲」シリーズ 第4集の3

絵葉書から見た満洲観光

―ハルビンを事例として―

日本大学文学部 情報科学研究所研究員 毛利康秀



はじめに

本報告は、中国東北部（満洲）に立地するハルビン（ハルピン、哈爾濱）市を題材とした絵葉書群（以下、ハルビン絵葉書）に着目し、メディア論ならびにツーリズム論の視点を加えつつ、ハルビン観光に及ぼした影響およびその社会的意味についての再検討を試みるものである。

絵葉書は、画像情報に私信を加えて相手にメッセージを伝達できるコミュニケーション・メディアである。旅行先で印象的な風景を友人に伝えたいと思えば、現地で絵葉書を買求め、簡単な私信を添えて投函すればよい。今日では、携帯電話

話やスマートフォンなどの情報端末を利用して、写真つき電子メール（いわゆる写メール）を送ることが当たり前になっているが、それらが普及する以前は絵葉書がその役割を担っていた。「画像情報＋私信を相手に伝達するコミュニケーション」という意味において、絵葉書は「写メールの起源」ともいえるべき存在であり、それは1世紀以上前から実現していたのである。

さて、ツーリズム（観光）研究の分野では、近年「コンテンツツーリズム」の概念が提起され、研究が進みつつある。これは小説や映画、ドラマ、漫画、アニメなどの作品（コンテンツ）に関連のある場所を訪れる形態の観光（ツーリズム）を指す。例えば、ハルビンは歴史の浅い

街であり、歴史的・伝統的な観光資源があるわけではないが、戦前期のハルビンは小説『ハルピン夜話』の舞台になった街として知られており、異国情緒（そして多分には夜の歓楽街での楽しみ）を求めて多くの日本人が訪れた。ハルビンは、コンテンツツーリズムの先駆的な舞台となった街であったと見なすことができる。

ハルビンを訪れた日本人旅行者は絵葉書を買求め、内地の家族や友人に差し出した。そこには、現地を訪れた感想が率直に綴られているものが多い。未使用のものも国内に持ち帰られて人々の目に触れ、ハルビンに対する街のイメージが強く喚起された。『ハルピン夜話』が文字情報から異国情緒をかき立てるメディア

アであるならば、ハルビン絵葉書は視覚的な画像情報を伝えるメディアとして同様に機能したと考えられる。

そこで、本報告では、ハルビン絵葉書の概要ならびに実際に使用された絵葉書の事例の紹介を行い、当時の日本人旅行者がハルビンに対して抱いていたイメージを浮かび上がらせたい。

1 メディアとしての絵葉書

まず、「メディアとしての絵葉書」について整理する。

絵葉書は、画像情報を大量に複製し流通させるメディア（媒体）である。その字義のとおり、絵画やイラストをあしらったものが想起されるが、写真を印刷した絵葉書もまた多く、流通量でいえばむしろ写真絵葉書の方が主流をなした。

絵葉書は1870年頃のドイツに起源を発するとされ、19世紀末から20世紀前半にかけて欧米各国で発行されるようになった。日本における絵葉書は、1900年10月、私製葉書の発行を許可する逓信省令が出されたことより始まる。これにより民間から絵葉書が売り出されるようになり、官製の絵葉書も登場して収集ブームが巻き起こった。日露戦争の戦勝

を記念する絵葉書は特に人気で、発売日には長蛇の列ができ、混雑のため死者まで出る騒ぎになったという。

絵葉書の流行は世界的規模で起こっており、フランスの文献によると、1905年における世界の絵葉書の発行数は18億2967万枚に達していた。

1920年代までの写真絵葉書は、事件やニュースに関する画像情報を伝達するマスメディアとしても機能した。当時は新聞紙に写真を印刷する技術が未発達であり、写真を広く大衆に伝達する役割は絵葉書が担っていた。

1923年に発生した関東大震災では、凄惨な災害の状況を伝えようとする膨大な量の写真絵葉書が発行され、全国に流通した。多数の焼死体が克明に映し出されたものまで出回り、当局によって発売禁止にされるものまであったという。当時の写真絵葉書は、現在の写真週刊誌と同等の機能さえ果たしていたのである。

1930年代以降、画像情報を伝達するメディアとして画報やグラフ誌等の雑誌が発達し、新聞紙面上にも写真が掲載されるようになる。それに伴い、絵葉書のマスメディアとしての役割は減少し、差出人から受取人へと伝達される私的なパーソナルメディアとしての役割が残っ

ていく。

旅行先での土産物は絵葉書が定番であった。当時、カメラはまだ高価なものであり普及しておらず、旅先の風景を持ち帰るアイテムとして絵葉書は人気であった。現在でも、絵葉書は観光土産としてその命脈を保っている。

2 ハルビン絵葉書の特徴

戦前の日本では、内地はもとより、台湾、樺太、関東州、朝鮮半島、南洋群島など、外地の絵葉書も多数発行された。満洲の絵葉書も数多く、ハルビン絵葉書はその中の一つとして位置づけられる。初期にはロシア製の絵葉書もあったが、ほとんどは日本人によって作られた。

ハルビン絵葉書は、その大半が市街地や建築物を写した写真絵葉書であった。とりわけヨーロッパ風（ロシア風）の建物や寺院が多いのが特色で、他の満洲の都市には見られない異彩をひときわ大きく放っていた。

図1は、1932年7月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書（表裏）である。中心市街地であるキタイスカヤ街の写真が使われている。内地でこの絵葉書を受け取った人は、国際都市・ハル

ビンのエキゾチックな雰囲気を感じたことだろう。「ハルビン之市中ハ裏面之様です 露人之多いのにハ恐いて居ます」と書かれたメッセージを読みつつ、遠い異国の地への思いを巡らせたのではないだろうか。



図1 1932年7月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書 写真はキタイスカヤ街



3 ツーリズム研究の新動向

次に、ツーリズム研究（観光研究）について取り上げる。近年におけるツーリズム研究の新動向として、「コンテンツツーリズム」に関する研究が進みつつある。この用語は、2005年に国土交通省・経済産業省・文化庁から出された『映像等コンテンツの制作・活用による地域振興のあり方に関する調査』で用いられてから広く採用されるようになったキーワードで、「地域に『コンテンツ』を通じて醸成された地域固有の雰囲気・イメージ」としての『物語性』『テーマ性』を付加し、その物語性を観光資源として活用すること」とする定義が広く用いられている。

すなわち、コンテンツツーリズムは、温泉や名所旧跡巡りなど、確立された観光地を巡る一般的なツーリズムとは異なり、これまで観光地として注目されなかった場所であっても、小説や映画、ドラマ、漫画、アニメなどの作品（コンテンツ）題材に取り上げられ、その物語性がメディア（特にマスメディア）によって広く流布されることによって観光（ツーリズム）へと結びつけられることを特徴としている。そのため、地域活性化や町おこしの

関連で論じられることが多い（例えば、大河ドラマの舞台となった街に観光客を誘致しようとする例がそれである）。

4 コンテンツツーリズムの舞台としてのハルビン

1923年に発売された小説『ハルビン夜話』（奥野他見男著）は、奔放なエロティシズムに満ちたロシア人ダンサーを描いて「裸踊りのバイブル」とも評され、130版以上を重ねるベストセラーになった。この頃より起こった満洲旅行ブームも手伝って、ハルビンは「内地客に手の届くエキゾチシズムとエロティシズムを提供してくれる国際的歓楽都市」として広く知られるようになった。

ハルビン観光において、ロシア人女性が欲望消費の対象として浮上したのは「驚くべき詩と酒と性欲の都」のコピーとともに宣伝された『ハルビン夜話』のベストセラーによるところが大きい。

当時出版された旅行記の記述を見ても、日本人旅行者にとってハルビンは歓楽街でロシア人女性ダンサーを見物することが定番となっていた。一例として、『満洲風物誌』（春山行夫著）には「哈爾濱まで行つて、かうした場所にゆかないで

帰る人間はまづないといふのが、苦笑すべき事実」「外国人が日本のフヂヤマとゲイシャ・ガールを見ないでは帰れないやうな風に、一般化・観光物化されてゐる」と記述されているように、このエキゾチシズムとエロティシズムの強烈なイメージが、ハルビンに対する興味・関心をかきたて、現地を訪問する動機形成への大きな要素になっていたと解してよい。ハルビン絵葉書にも、ロシア人ダンサーを描いたものやロシア人美女との交歓を題材にしたものが登場しており、ハルビンという街のイメージ形成を後押しした。

ハルビンは、東清鉄道を敷設した帝政ロシアによって1898年から都市建設が始まるまでは一寒村に過ぎなかった。歴史的・伝統的に見るべきものはないが、代わりに異国情緒とエキゾチシズム・エロティシズムというイメージに基づく「テーマ性」が観光資源となった。さらに、日露戦争期における志士の最期の地、伊藤博文公の遭難の地といった「物語性」の要素も付加され、戦前の日本人にとって訪れてみたい観光の目的地へと意識されるようになっていった。

その意味において、ハルビンはコンテンツツリーゾムの先駆的な舞台となった街であると見なすことが可能である。

5 ハルビン絵葉書の使用例

ある地域を舞台とした作品（コンテンツ）が地域固有の雰囲気・イメージを醸成し、その地域を表現した絵葉書のメディア的な特性（画像情報＋私信）がその醸成を補うならば、絵葉書はコンテンツツリーゾムを促進させるためのメディアとして機能する。すなわち、小説『ハルビン夜話』で表現された異国情緒あふれる雰囲気・イメージは、ハルビン絵葉書の画像情報によって補われ、さらに私信が付け加えられることによるコミュニケーションの広がりは、現地を訪れてみたいと考える人を増やす効果があるものと考えられる。

ここでは、当時のハルビンを訪れた日本人が実際に差し出した絵葉書を幾つか紹介する（絵葉書は日本大学文学部所蔵および筆者所蔵のものを使用した。な

お、個人情報保護の世相に留意し、個人名の一部は伏せて紹介する）。1916年10月にハルビンから福岡県宛に差し出された絵葉書（図2）には、旅行の行程の説明が主で、ハルビンについての感想は特に記されていないが、ハルビンの街路の写真が使われており、現地を訪れた雰囲気は伝わっている。当時の郵便局はロシアによって運営されており、ロシアの切手が貼付されているが、絵葉書自体は哈爾濱安高洋行が発行した日本製であり、当時から既に日本人が活動していたことを裏付けている。



図2 1916年10月2日（ロシア暦9月19日）にハルビンから福岡県宛に差し出された絵葉書写真はハルビンの街路



図3 1926年6月にハルビンから京都宛に差し出された絵葉書 写真はハルビンの市街地と中央寺院



図4 1936年11月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書 写真はロシア人母子が休んでいる公園（彩色）



図5 1939年8月に大連から兵庫県宛に差し出された絵葉書 写真はキタイスカヤ街とロシア人女性



旅行者による絵葉書は1920年代以降から見られるようになる。1926年6月にハルビンから京都宛に差し出された絵葉書(図3)には放浪同然の旅行の果てにハルビンまで到達したことが書か

れている。市街地と中央寺院の写真が使われており、ロシア情緒が表されている。満洲国期に入ると、観光でハルビンを訪れる日本人が増加していく。1936年11月にハルビンから東京宛に差し出さ

れた絵葉書(図4)には、ロシア人ダンサーのダンスを見物したことが書かれている。絵葉書もロシア人母子の写真が選ばれている。この頃には写真に彩色を施したカラーの絵葉書も増えている。



図5 1939年8月に大連から兵庫県宛てに差し出された絵葉書 (図5) には、キタイスカヤ街とロシア人女性の写真が使われ、修学旅行で朝鮮から奉天や新京、ハルビンを巡ったことが書かれており、



図6 1940年9月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書 イラストはソフィスカヤ寺院



図7 1943年5月にハルビンから千葉県宛に差し出された絵葉書 写真はソフィスカヤ寺院

1939年8月に大連から兵庫県宛てに差し出された絵葉書 (図5) には、キタイスカヤ街とロシア人女性の写真が使われ、修学旅行で朝鮮から奉天や新京、ハルビンを巡ったことが書かれており、

ハルビンの街並みやロシア人の音楽の美しさについての感想もある。1930年代以降、満洲への修学旅行が盛んに行われるようになっており、団体客の大半は修学旅行生が占めていた。

1940年9月にハルビンから東京宛に差し出された絵葉書 (図6) にはソフィスカヤ寺院のイラストが選ばれており、「露助のメツチエンに心も眼も奪はれて居る始末」と、若いロシア人女性に魅了される様子が書き留められている。

1943年5月にハルビンから千葉県宛に差し出された絵葉書 (図7) には「エハガキが実に少ない」と書かれており、太平洋方面にまで拡大した戦争の影響が及んでいるためか、絵葉書の不足が始まっている様が記されている。使用された絵葉書も、市内観光バスの乗車券の半券 (絵葉書として使えるものでソフィスカヤ寺院があしらわれている) を活用している。

6 国策による満洲観光と絵葉書の選択的受容

絵葉書は、カメラが高価なぜいたく品であった時代において、今日でいう写メーのような画像コミュニケーションに用いることができた。もっとも伝達できる画像はでき合いの絵葉書の中からしか選べないので、一番のお気に入りには自分の手元に残したかもしれないが、基本的に「相手に伝えたい」と思った図柄が選ばれたと考えてよい。よって、実際に使用された絵葉書の図柄からは、「この画像を見て」という旅行者のメッセージを読み取ることができる。

ところで、満洲国の観光は、日本の方を向いた国策を色濃く反映するものであった。ハルビンにはロシア風の異国情緒が特色であったが、満洲国が成立して以降、街には日本的な要素が増やされていき、観光スポットも「日本的なるもの」が強く奨められるようになった。

一例を挙げると、1937年に哈爾濱観光協会が発行した観光パンフレット『観光の哈爾濱』には、推奨する観光地として「哈爾濱八景」が列挙されているが、「忠霊塔」「志士の碑」「哈爾濱神社」

「伊藤公遭難の地（哈爾濱駅）」など「日本的なるもの」が大半を占めており、ロシア的な要素は「中央寺院」「キタイスカヤ」しか出てこない。1942年に作られた『哈爾濱名所アルバム』でも、紹介されている名所³²か所のうち、最初に「忠霊塔」「哈爾濱神社」「志士の碑」など「日本的なるもの」が多く列挙されており、「ロシア的なるもの」「中国的なるもの」は後回しになっている。

絵葉書もまた同様で、満洲国期のハルビン絵葉書は、ロシア的な異国情緒を表す図柄が依然として多いものの、「哈爾濱神社」や「志士の碑」など「日本的なるもの」の絵葉書の割合が増えている。

しかし、実際にハルビンから差し出された絵葉書を見渡すと、「中央寺院」「キタイスカヤ」をはじめとする「ロシア的なるもの」を表した図柄が好んで使われている。すなわち、旅行者がハルビンに求めていたものは「ロシア的な異国情緒」であり、その景色を伝えたいと思ったからこそ、ハルビンから差し出す絵葉書には「ロシア的なるもの」が選ばれたと考えられる（一方、軍事郵便として使用された絵葉書には、図8のように「日本的なるもの」が使われる例が目立つ）。

画像コミュニケーションの視点から見

ると、「国策としての満洲観光の推奨モデル」は必ずしもそのまま受容されていたわけではない（「日本的なもの」が奨められても、ハルビン観光では「ロシア的な異国情緒」が好まれ、伝えられよう



図8 1937年10月にハルビンから山形県宛に差し出された絵葉書（軍事郵便） 写真は哈爾濱神社（彩色）



とした）ことが浮かび上がる。

まとめ

絵葉書は、出現した時代においては、数少ない視覚情報の伝達メディアであり、当初はマスメディアとしての機能も有していた。大量に発行され、比較的廉価で買い揃えることが可能で、それゆえ収集の対象として人気を集めるメディアでもあった。絵葉書は郵便制度の周辺にあって、郵便切手ほど国家の政策と密接に関わるものではないが、一定の政治的な影響を受けつつ、人々とのコミュニケーションや消費文化を形作るメディアとして活用された。

観光地で買い求められた絵葉書は、一部は実際に使用され、未使用の絵葉書もそのまま持ち帰られて、多くの人々の目に触れることになった。絵葉書の普及は、印刷がもたらした大量生産による大衆化であり、郵便制度がもたらしたコミュニケーションの新しい形態の一翼を担うものであり、写真がもたらした視覚情報の拡大であった。

満洲の記憶といえ、どうしても悲劇的なものが多くなってしまうが、絵葉書に限って言うならば、それは平穏な時代の所産であり、満洲観光の順調な発展を

映し出すものであり、先端的な画像コミュニケーションを実現するものであった。

戦前のハルビンには「極東のモスクワ」

「東洋のパリ」と称されるエキゾチックな街であり、当時の日本人にとって安全に到達できる「身近なヨーロッパ」であった。満洲旅行ブームも手伝って、多くの日本人がハルビンを訪問した。『ハルビン夜話』というコンテンツが街のイメージを形成し、異国情緒をかき立てるメディアであったならば、ハルビン絵葉書は画像情報（＋私信）をもって街のイメージを補強するメディアとして同様に機能した。都市建設から日が浅く、歴史的・伝統的な観光資源が存在しないハルビンは、これらのメディアによる魅力の周知が現地訪問への動機形成にとってとりわけ重要であり、不可欠なものであった。近年、コンテンツ作品を題材に、メディアによって地域のイメージが形成され観光が喚起される「コンテンツツーリズム」への注目が高まりつつあるが、ハルビン絵葉書はその創出の先駆けをなすメディアの一つとして一定の役割を担っていたと判断してよい。

本報告ではハルビンを訪れた旅行者の絵葉書を事例として取り上げたが、他の都市の絵葉書も大量に現存している。これらも含め、絵葉書の流通によって実際

の観光行動の拡大にどのくらい寄与したかの検証を進めていくことが今後の課題である。

2015年現在、ハルビン市では土産用の絵葉書（中国製）の入手が可能である。注目するべきことに、復刻版のセットまで売られている。その大半は戦前に日本人が制作した写真絵葉書の複製で、市街地の中にある日本語の看板もそのまま採録されている。復刻版をきっかけとして当時への関心が高まり、かつての日本人の活動に思いを馳せる人が増えてほしいところである。

（2015年12月16日・公開フォーラム）

講師略歴（もうり やすひで）

1968年大阪府東大阪市生まれ。日本大学法学部卒、実教出版を経て、2002年3月、日本大学大学院文学研究科（社会学専攻）博士後期課程単位取得退学。現在は日本大学文理学部情報科学研究所研究員・非常勤講師、国士舘大学、高千穂大学兼任講師、コンテンツツーリズム学会理事、せいせき観光まちづくり会議副座長。

専門は社会学（メディア・コミュニケーション論、ツーリズム論、歴史社会学など）。